鹽　竈　神　社

●塩竈（地名）の由来

塩竈の地名は、太古の伝説に由来し名付けられたものです。伝説によると塩土老翁神（しおつちおじのかみ）は、国土鎮護の神である武甕槌神（たけみかづちのかみ）（茨城県鹿島神宮）と経津主神（ふつぬしのかみ）（千葉県香取神宮）を先導して東北地方の平定のために当地を訪れたとされています。その後、武甕槌神と経津主神はそれぞれの宮に戻りましたが、塩土老翁神は当地にとどまって人々に漁業などの生業を授け、製塩法を教えたと伝えられています。

この伝説から、海水を煮て塩をつくる竈（かまど）がある場所として、塩竈が地名になったといわれています。

【　コ　ラ　ム　】

～塩竈、鹽竈、塩釜、鹽釜～

釜は飯を炊いたり湯を沸かしたりする“なべ・かま”のかまを表わすのに対し、竈はその釜をのせるかまどのことで、両者の字義は異なります。

塩竈市は1941（昭和16）年、地名の由来から塩竈を正式名称とし、それまでバラバラに使用されていた表記（塩竈、鹽竈、塩釜、鹽釜）を、市の内部で作成される公文書等では塩竈と表記することに統一しました。しかし竈の字は画数が多く（21画）、書き方も難しいため、当て字の釜が一般化していることも考慮し、市民や他官庁などから提出される文書等は釜も竈と同様に取り扱っています。一方で竈の字を正しく理解してもらうため、ホームページで筆順を紹介するなどのPRに努めています。（鹽竈神社の鹽の字は旧字体で他に用いられることはあまりなく、常用漢字の塩が一般的に用いられています。）

●志波彦神社 鹽竈神社

○歴　史

鹽竈神社創建の年代等は詳らかではありませんが、平安時代初期の史料には中央政府から破格の祭祀料を受けていたことが記されており、その起源は少なくとも奈良時代以前に遡るものと考えられています。

国府多賀城の鬼門（北東の方角）に位置することから、国府の守護と蝦夷地平定の精神的な支えとして朝廷や国司などに崇敬されていたと伝えられ、その後も、陸奥国一ノ宮・総鎮守として歴代の武将や幕府、一般庶民等の崇敬を集めました。また江戸時代から明治時代に至るまでは仙台藩（伊達家）の崇敬が特に篤く、歴代藩主は大神主として祭事を司るとともに社殿の造営や社領、太刀、神馬の寄進など、手厚く保護してきました。明治時代には志波彦神社を境内に遷座し、現在の正式名称は「志波彦神社 鹽竈神社」となっています。

志波彦神社創建の年代は不詳とされていますが、平安時代中期に編纂された神名帳（じんみょうちょう）（全国の神社一覧）では格の高い名神大社（みょうじんたいしゃ）に格付けされるなど、朝廷の崇敬が特に篤い、由緒ある神社とされています。

もとは岩切村（現仙台市宮城野区岩切）にありましたが、1874（明治7）年に鹽竈神社別宮に遷座・合祀された後、1938（昭和13）年に現在の社殿に遷座されました。志波彦神は鹽竈神社の祭神に協力した神と伝えられ、国土開発、殖産、農耕守護の神として崇敬されています。

本殿が黒漆塗りで拝殿は朱漆塗りという極彩色の社殿は1963（昭和38）年、塩竈市の文化財に指定されました。

鹽　竈　神　社

写真提供：宮城県教育委員会

○祭神と信仰

鹽竈神社は、別宮に主祭神の塩土老翁神、本宮の左宮に武甕槌神、右宮に経津主神の3神が祀られています。古くは鹽竈宮や鹽竈明神、鹽竈六所明神などと称され、祭神にも諸説があったといわれていますが、伊達家第4代藩主綱村により「鹽竈神社縁起」の編纂が行われ、祭神を現在の3神としました。

祭神が国土鎮護などの神であることから海上安全や武運長久、国家安泰などの信仰が古くからあり、やがて人の生死と潮の満ち引きの関係や海が産みに通じることから安産守護・延命長寿等の信仰が盛んになりました。更に当社が多賀城の鬼門の守護神であったことから厄除け・方除けの信仰も盛んになったといわれています。

【コラム】

～鹽竈ザクラ～

鹽竈ザクラは鹽竈神社の境内にあるサトザクラ系の八重桜で、極く短い花軸に淡紅色の花が密に群生しており、めしべの2～3枚が変化して緑色の葉となるのが特徴で、例年4月下旬から5月上旬が花期となります。

鹽竈ザクラの由来は不明とされていますが、第73代堀川帝の御製（天皇の作った詩文）にその名がみられるなど、古来著名な品種として1940（昭和15）年、国の天然記念物に指定されました。その後、1959（昭和34）年に天然記念物指定木の枯損により一時指定が解除されましたが、接木による苗木育成・植栽で保存が図られ、後継木が1987（昭和62）年に再指定されました。

現在、境内には約60本の鹽竈ザクラがありますが、そのうち27本が天然記念物に指定されており、単木ではなく品種そのものが指定されています。

○社殿

現在の社殿は、1695（元禄8）年に伊達綱村によって造営が始められ、1704（宝永元）年に竣工したもので、正面に左宮と右宮を持つ本宮、その右手に別宮という3本殿2拝殿の珍しい社殿構成となっています。本宮は、大神主が城から遥拝（遠くから拝むこと）できるように仙台城の方向に向けて建てられ、別宮は、同時に海上守護の主祭神に海難を背負ってもらうため海に背を向けているとされています。

本殿は素木・三間社流造り檜皮葺と質素である一方、拝殿は朱漆塗り・入母屋造り銅版葺と豪華で対照的な造りとなっており、元禄時代の貴重な建築群として2002（平成14）年に四足門（唐門）や回廊、随神門（楼門）など14棟および石鳥居とともに国の重要文化財に指定されました。

●御釜神社と藻塩焼神事

御釜神社は鹽竈神社の末社で、鹽竈神社と同じ塩土老翁神を祭神としており、塩竈市中心部の商店街にある境内には、塩土老翁神が人々に製塩法を教えた際に用いたと伝えられ、鹽竈神社の神器とされる4口の竈が安置されています。

毎年7月には、鹽竈神社の例祭で神饌（神に供える食物など）として供えるための塩を作る藻塩焼神事が行われます。神事では、ホンダワラ（海藻）を採取する藻刈、釜の潮水を入れ替える御水替、釜で潮水を煮詰める藻塩焼などが行われ、古代の一連の製塩に関する行事を現代に伝えるものとなっています。古代の製塩法を今に伝える藻塩焼神事は1979（昭和54）年、県の無形民俗文化財に指定されました。

鹽竈神社は、多くの人々に親しみを込めて“しおがまさん”と呼ばれており、初詣には例年、県内外から約50万人もの参詣者が訪れます。また、氏子三祭と称される帆手祭（3月10日）、花祭（4月第4日曜日）、みなと祭（7月第3月曜日）に多くの観光客が訪れるなど、年中参拝者で賑わっています。今後とも有形・無形の文化財等や伝統・歴史の継承とともに、貴重な地域資源として地域の賑わいに貢献していくことが期待されます。

藻　塩　焼　神　事

写真提供：宮城県教育委員会

（参考資料）

・宮城県HP　・塩竈市HP

・志波彦神社 鹽竈神社HP　・新聞各紙ほか